

粹で雅な町

「ここ」で来るか...

栃木市文化団体連絡協議会設立四十周年記念、ベートーヴェンの交響曲第九番演奏会(令和元年十二月十四日)でのこと。第四楽章、パルトンのFreude(フロイデ・歓喜)で始まる二長調四分の四拍子の歓喜の歌が、壮大な合唱の響きで終わり、変ロ長調八分の六拍子 Alla marcia になる、そのタイミングで、大きな拍手が巻き起こったのです。

絶妙のタイミングで「音羽屋」成駒屋と大向こうが掛かって盛り上がる歌舞伎。カラオケもそうでしょう。演ずる者と観る者が共に作り上げるのが舞台、ではありません。

ただ、大向うにも不文律があり、劇場の後方から、舞台が無音の時に、男性が、掛けるもの、女が、それに則った大向こうは「粋」、そうでないのは「野暮」。歌舞伎を知らない者が見ると、思い思いにかけているように見える大向こう、掛け声にも、観劇経験の蓄積が必要でしょう。

第九も同様でしょう。栃木で拍手が起きた場面は、完全終止ではありませんが、終わった感じはするので、カラオケ的には、拍手のタイミングです。しかし、第九の第四楽章は細かく分けると十二の部分からなり、それを一続きとして聴くのがいわば「不文律」です。カラオケのように、一番が終わったら終わり、ではなく、曲想の違う音楽が続いて奏され、その変化を楽しむのがクラシック音楽、とりわけ交響曲のような楽曲の楽しみ方のひとつです。今回の栃木の拍手は、そのことを知らない、生活の中にそうした経験や習慣がない、ことを明かしてしまいました。ちょっと格好悪い。

たしかに、一九八〇年代の富山市も、楽章間で盛大な拍手が湧き起こる町でした。ところが、二〇〇五年を過ぎたあたりから、音楽大学大学院学生の演奏の出来の微妙な違いに反応し、来演したパリ管弦楽団のチャイコフスキー「悲愴交響曲」の完成度と、ラベル『ダフニスとクロエ』の完成度の違いに正確な拍手が格好悪い。



令和元年(2019)12月14日
栃木市栃木文化会館大ホール

栃木地区で活動する楽団、合唱団が力を合わせ、第九を演奏する姿に、甚大な災害に見舞われた栃木市民の団結力を感じ、熱くなる気持ちがこみ上げてきた、との声も聞かれた。

手を贈り分ける聴衆に変わりました。平成十年(一九九八)、栃木市で開催された音楽祭サミットにも参加した富山市と栃木市。片や洗練された聴衆を生み出す芸術文化都市建設に邁進し、片や四十年前の地方都市のレベルがそのままになってしまっている。

英国で五十歳以上の成人六七一〇例を対象に、博物館、美術館、コンサートなどに足を運ぶ受容的芸術活動の頻度と死亡率の関連を十四年間調査した縦断的前向きコホート研究によると、受容的芸術活動に低頻度(年一回または二回)に従事した人は、受容的芸術活動が一度もなかった人と比較して、死亡リスクが十四%低かった。頻繁(数カ月ごとまたはそれ以上)に受容的芸術活動に従事した人は、人口統計学的、社会的、健康的、健康関連行動関連および社会的要因に関係なく死亡のリスクが三十一%低かった、といわれています。

日向野義幸

年頭の思い

令和二年の新春を迎え、心からお慶び申し上げます。

御世代わりの希望の年に、自然の猛威という厳しい現実を突きつけられた私たちは、今年こそは平穏な一年であってほしいと願って止みません。

昨年の十九号台風による豪雨災害では、多くの箇所河川の氾濫や土砂崩れが発生し、四名の死者と二三名の重軽傷者、住宅の全壊半壊、一部損壊が計七三八棟、床上・床下浸水が計五六一棟に上ったほか、農作物や農業用施設、設備、商業施設、工業施設、河川砂防、道路、林道等の公共土木施設に甚大な被害が生じ、県内全域に大きな爪痕を残すこととなりました。

この災害により、尊い命を失われた方に謹

んで哀悼の意を表しますとともに被災された多くの皆様には、あらためてお見舞いを申し上げます。

建設業界各種団体等 支援の皆様へ感謝

令和元年十月十二日の発災後直ちに栃木土木事務所、下都賀振興事務所と共に、災害箇所調査を開始し、栃木市災害対策本部とも連携を取りながら、まずは、二次被災防止の為に河川決壊箇所等の応急復旧工事や道路への流入土砂撤出清掃とライフライン等の早期回復に全力を注ぎました。この間、発災前から災害対策の準備、発災後の不眠不休の仮復旧活動等に従事されました栃木市建設業関連団体連絡協議会各社の皆様に心から敬意を表するところであります。又、災害時の支援対応や、被災ゴミの収集運搬、集積、被災家屋の復旧支援等に携わって頂いた県、市の行政職員、応援を頂いた国や支援行政の皆様、自衛隊、消防、警察等の関係者の皆様、支援企業、団体、ボランティアの皆様に対し心から御礼を申し上げます。

とちぎ自民党議員会 災害対策予算対応

とちぎ自民党議員会としては発災後の政務調査会による被災現地調査活動を行い、十月三十日には、緊急臨時議会を招集し、災害の規模と内容、復旧、復興の方針、被災時の問題提起等、知事はじめ執行部に質し、さらに十一月八日には災害に伴う緊急補正予算五十七億二九七九万円を可決成立させ、加えて十二月定例会では、追加補正予算四億二八八四万円を可決成立し、すみやかな災害復旧、復興への着手に道すじをつけたところであり、さらに、国、本県選出自民党国会議員に対

年一月二十一日深夜便アークイブス)「人口減少に歯止めがかかっている町は、教育と文化に力を入れている町だ。就職先も大切だが、若い人や女性が求めているのは『楽しい場所』であり、『いい教育の場』だからだ。さあ、どうしましょう。栃木市には、コストもいいかもしれませんが、『いい学校』、『市民文化事業団』こそ、必要なのではないでしょうか。

後援会からのお知らせ

プロジェクトチーム始動

- 日向野後援会では、太平山再開発、東武JR直通快速構想、及び、栃木市治水対策等に関する調査研究を行い、日向野義幸の政策実現と栃木市の発展に寄与するため、次の三つのプロジェクトチームを設置して活動することになりました。
 - **太平山再開発構想プロジェクトチーム**
部長 梶原崇人 君
副部長 杉本 浩一 君
● 太平山の歴史を知る
● 登山道、道標の整備
● 山の樹木の整備など
 - 太平山へのアクセスの研究
● 山歩きの後、汗を流せる入浴施設があるといい
● 山麓の魅力(ブドウ園地など)
● 地域住民にとつての太平山 など
 - 他地域の人にとつての太平山 など
 - **東武JR直通快速構想プロジェクトチーム**
部長 平野 和正 君
● 沿線他地域との連携
● 町の声をどう集約するか、
● 鉄道会社との話し合い など
 - **栃木市の治水対策プロジェクトチーム**
部長 森田昇一 君
● 治水政策の現況調査
● 田んぼダム実現に向けて など
- 皆様のご支援ご協力と、興味ある部会への参加をお待ちしています。

防災減災のため 調整池・ダムを活用

こうした被災地の動きに呼応し、政府は被災地の生活となりわいの再建に向けた政策パッケージを取りまとめ準備費の使用を閣議決定しました。引き続き復旧、復興の加速化とあわせ、去年決定した防災減災の三年間の緊急対策を着実に実行するとともに、今回の被害を検証し、例えばダムや調整池の活用など水害対策を中心に防災、減災、国土強靱化をさらに強く進める様、望むものであります。今回の災害では、利根川水系にあるハツ場ダムを含む七つのダムと渡良瀬遊水地を含む四つ調整池が東京を救ったと言われています。

この四つの調整池で貯水した量は過去最大の二億五千万立方メートル(東京ドーム二〇〇杯分)となり、その六四%を渡良瀬遊水地が担いました。しかし、渡良瀬遊水地では、発災後翌十三日九時に貯水量のピークを迎え、一億六千万立方メートル最大の貯水量の九五%に達し、同様の雨があ



日向野県議が国会議員に陳情する

令和二年は庚子。「庚」は、更なる様子を感じ、前年の己まででついたものから不要ものを削ぎ落とし、新しい環境に対応する体制を整える年だそう。子「子」は、万物が成長し増えていく時期とか。災害にみまわれない、粋で雅な町となるよう、皆が成長し心ある人々が増えていけばよい、と祈る新春で(申丸)

元氣いっぱい美幸会忘年会

後援会女性部「美幸会・川津美知子会長」恒例の忘年会が12月26日(木)に、会員120名が参加して行われました。川津会長さんからも多くの皆さんの参加に感謝と、「引き続き日向野県議を支えて頑張りましょう」との挨拶がありました。

日向野県議からは、台風19号の災害対応等についての報告と、県議選の選対活動支援に感謝の言葉を述べられました。懇親会は、カラオケや踊りで盛り上がり、元氣いっぱい、「女性パワー満開」の大宴会になりました。



未来ネットワーク通信

2020年2月号

編集・発行 ひがの義幸後援会総連合会
発行日 令和2年(2020)2月11日
編集責任者 高田 良久
事務局 〒328-0075 栃木県栃木市箱森町7-9
TEL 0282-23-8855
FAX 0282-23-8856
E-mail info@higano.jp

と一時間降り続いたら、渡良瀬遊水地も氾濫していただろうと言われています。東京を守る為に我々の郷土が犠牲になる様な理不尽な事があってはなりません。

国や県、市町村が力を合わせ我が国の治水対策を抜本的に見直しハード・ソフトの両面に講じるべきと考えます。

また、今回の災害で死亡した人の七割がハザードマップで危険性が指摘された場所被災してしまいました。あらかじめわかっているリスクを把握し、早めの避難を心がけることが重要なことは、今後も変わりはありません。そのうえで、台風十九号に突きつけられた課題は「想定外には限界がある」ことでした。国や自治体には「想定外」を減らす努力が求められますが、私たちも日頃から「自分が住む場所を知る」努力が欠かせないと強く感じました。「うちは大丈夫」と思うのではなく、もしも近くの川が溢れたら?、崖が崩れたら?と想像してみることが大切です。

今回の経験を糧に様々なケースを想定しながら対策を練り、想定外がいつ起こってもおかしくない事を肝に銘じ、状況の把握と冷静な行動がとれる様、日頃の準備を怠らないことが必要と感じました。

いよいよ本年は「復旧・復興元年」、一日も早く、被災者の皆様が今までと同じ以上の生活を取り戻すことが出来る様、最大限の力を注いでいく覚悟です。

「新天皇誕生を寿ぐ」

御世代わりの年に天皇陛下御即位をお祝いする国民祭典に議會を代表して参列出来た事は、生涯忘れ得ぬ大きな出来事となりました。新天皇誕生を国民の皆様と共に喜び、その感動と興奮を共有し、間近に天皇皇后両陛下のご尊顔を拝する事が出来た時、何故か涙が止まらなかった。「この日本という国に日本人として生まれ、この日本という国に生かされた。日本に生まれて良かった。」日本の国柄に触れる事が出来た貴重な時間でした。

未来ネットワーク通信

ひがの義幸
県政だより

2020.2

水害のない町を築く

—めざせ総合治水—



写真3 2019年11月2日 運動公園に集積された災害廃棄物

表1

地点	降水量(10/11-13)
栃木	305mm
小山	219mm
新百合(上永野)	500mm
上粕尾(栗野)	479mm

が、利根川から分かれて東京湾にそそぐ江戸川は氾濫危険水位に達しなかつた。写真5は埼玉県戸田市の荒川貯水池・第一調節池の状況だが、総貯留量三千九百五十万トンのうち、三千五百万トンの水

「水は怖いですよ。音もなく結構な速さでやってくるんですから」「寝ていたら体が浮く感じがして、起きたらもう一面水浸しです」

菌部町で被災された方々は、夜の床上浸水の恐怖をこう語る。

台風十九号の豪雨により、永野川が錦着山の裏手、上人橋上と、川連の両毛線鉄橋の下で決壊。上人橋上からの濁流は、菌部町、柳橋町、富士見町、祝町、入舟町、湊町、片柳町に押し寄せ、水が巴波川に入った影響で河合町、境町、沼和田町、大平町高島も浸水被害に見舞われた。一方、川連からの濁流は、東



▲写真1 2019年10月14日 線路を支える道床が流された東武日光線静和駅付近



▲写真2 2019年10月17日 上) 路盤が流され、宙に浮いた両毛線の線路(川連) 下) 藁と流木に埋め尽くされた両毛線の線路(下皆川)

武線の道床までも押し流した。(写真1) (図1のピンクの部分)が甚大な浸水域)この影響で、東武線南栗橋-栃木間は一週間、両毛線栃木-岩舟間は一か月間、不通となった(写真2)。代替バスが運行されたが二倍以上の時間がかかり、同線を利用する通勤通学者に多大な影響が出た。

「五十年に一度」といわれた二〇一五年の関東東北豪雨。しかし今回の台風十九号による災害は、それを上回るかに上回るものだ。浸水被害に遭った住宅からは家電製品、畳等の災害廃棄物が多量に排出され、運動公園駐車場、警察跡地などに集積された(写真3)。

表1は、台風十九号による地点別降雨量である。山間部が平野部の一・六倍ほど降っていることがわかる。関東東北豪雨は、線状降水帯がかかった平地での降雨量が多かったのに比し、今回の豪雨は、山地に降り、その水が下ってきて街に襲い掛かったのだ。

治水の原則

こうした豪雨災害をもたらす台風の原因は、海水温の上昇など、地球規模の環境変化が原因と考えられるため、「何十年に一度」といった「前例」にとらわれず、「次がある」ことに備え、抜本的な対策をとる必要がある。

治水の原則は「洪水の水位を下げる」ことである。そうして堤防に負担を掛けず、決壊を防ぐ。水位を下げるには、

一、水を貯める

二、水を流す

「水を貯める」方法としては、貯水池・調整池が有効だ。本会藤岡支部長の関根茂氏(写真4)が、渡良瀬遊水地は、今回の台風で総貯留量一億七千万トンのうち、過去最大となる一億六千万トンを貯めこんだ。この結果、利根川栗橋測候所では氾濫危険水位を超えた



写真4 台風19号通過後の渡良瀬遊水地。木が水に埋まっている 撮影：関根茂氏



図1 永野川決壊箇所と浸水域



写真5 荒川第一調節池 荒川上流河川事務所による

ほかの問題

今回の水害では、藁の問題も大きかった。ダイオキシンを心配してか、田圃で藁を燃やすことが禁じられているようだが、橋脚などに藁が溜まってダム状になり、溢水や氾濫の誘因になったのではないかと、この見方もある。藁だけであれば、有害な化学物質も出ないだろうから、土に戻す意味で、焼却を可能にするなどの見直しも必要ではないだろうか。

さらに今回の水害では、栃木西中や長寿園など、避難所が被災したケースもある。また、避難所に向かう途中に川があり、避難ができて危険な所もあり、安全な避難所・避難



写真6 巴波川の中洲

経路策定も急務だろう。そうしたことを含め、自主防災組織の拡充等も必要だろう。

総合治水・強化投資

元国土交通省河川局長で、現在、日本水フォーラム事務局長を務められる竹村公太郎氏は、「大河川の利根川、気象が狂暴化して行く利根川、首都圏を抱えた利根川では、一つの施設などでは治水は解決しない。チーム・利根川で首都圏の安全を守っていく。江戸時代からある堤防を強化する。川底の浚渫をする。遊水池を整備する。ダムを建設する。既存ダムの嵩上げをする。そして、気象の狂暴化に応じて、先輩たちが整備した施設の運用を見直していく。複数の施設がチームとなり首都圏を守る。江戸時代の知恵(四百年前、徳川家康が江戸湾に流れ込んでいた利根川を、栗橋と関宿の台地を開削して銚子へ誘導したこと)を指す」と二十一世紀の最新の知恵がチームとなって首都圏を守っていく。これしかない。」と、「総合治水」を説く。

対策1 水を貯える

- 1-1 山の保水力の増強
- 1-2 貯水池・調整池の整備
- 1-3 田んぼダム機能の充実

対策2 水を流す

- 2-1 河床浚渫
- 2-2 導水管の整備(巴波川)
- 2-3 川幅の拡大・堤防の強化

国管理の一級河川、利根川などへの流量制限との兼ね合いをどうするか、が大きな課題

対策3 避難所と避難経路

- 3-1 安全な避難所の設置
- 3-2 安全な避難経路の設定
- 3-3 自主防災組織の拡充等

一方、京都大学大学院の藤井聡教授は、今回の水害に対し、「北関東・東北地方には無数の『決壊』が見られる。一方で、東京や横浜等、関東の都心部では『決壊』は全く見られない。こうした結果となったのは、偏に、関東の都心部には、様々な治水投資されてきた一方で、北関東・東北地方への治水投資は限定的であったからだ。」

西前原地区湛水範囲



写真7 手前が渡良瀬遊水地。堤防のむこうに浸水域がある。

九十年代から日本の治水投資は大きく削減され、かつての半分程度の水準に落ち込んでいる。この二十一年間で軽く見積もって約八兆円の治水投資が削減されたが、もし、それがそのまま投資されていたら、決壊箇所は今回の一・二八兆所の半分、あるいはもっと少なかったかと思われる。つまり、八兆円の治水投資を『ケチった』ことで、地方部における経済被害(税収の縮小等)、財政被害(復旧・復興費用等)を拡大させることになった。現在行われている政府の年額一兆円程度で三兆年の『強靱化投資』は全く不足。食料、エネルギー、国土構造分散化を見据えるなら、十年で二百兆円規模の投資が必要であることは論を俟たない。」

と、治水に対する国の政策、投資計画の問題を指摘する。

写真7は、藤岡町西前原の排水機場が、今回は機能したにもかかわらず、遊水池が満杯のため、周辺が浸水に見舞われた状況を示す。「遊水池が溢れても利根川を守れ」。これが国土交通省の通達だという。

我々栃木市民は、こうしたことをすべて見据えて、住む町の安全を築いていかなくてはならない。